

麦野 C 遺跡

—第10次調査報告—

2 0 0 6

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジアの文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果、数多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。福岡市教育委員会では、これら遺産を保護するという立場から、市内の遺跡把握に努め、発掘調査を行って、記録保存という形で往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成17年度に行いました、麦野C遺跡第10次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対するご理解の一助となり、考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査におきまして費用の負担をはじめ、数々のご協力を戴きました、松尾伊都子氏をはじめとする関係各位に深く御礼申し上げます。

平成18年10月13日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

— 例 言 —

- ・本書は福岡市教育委員会が2005年4月15日から5月31日にかけて行った麦野C遺跡第10次調査の報告である。調査は蔵富士寛が担当した。
- ・本書の編集、執筆は蔵富士が行った。また遺物の実測に関しては、米倉法子の手を煩わせた。
- ・本書における方位は真北であり、遺構については竪穴住居(SC)、溝(SD)、土坑(SK)等の略称を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目 次

I	はじめに	
	1. 調査にいたる経緯	1
	2. 調査の組織	1
II	調査の経過	
	1. 麦野C遺跡	2
III	調査の記録	
	1. 調査および遺跡の概要	4
	2. 遺構・遺物	4
IV	おわりに	10

挿 図 目 次

図1	周辺の遺跡 (1/25,000)	2
図2	麦野C遺跡 (1/8,000)	3
図3	調査範囲 (1/500)	4
図4	遺構配置 (1/200)	5
図5	SC02 (1/40)	6
図6	SC02出土遺物 (1/3)	7
図7	SD (1/200,1/60)	8
図8	SD01・05出土遺物 (1/3)	9
図9	SK03 (1/60,1/3)	10

図 版 目 次

図版1	上 調査区北東側全景 (南西から)	下 調査区南西側全景 (北東から)
図版2	上 SC02 (南から)	中 SC02竈 (南から) 下 SK03 (北東から)
図版3	上 SD01 (北から)	中 SD01 (南から) 下 SD01土層 (北から)
図版4	上 SD05 (西から)	中 SD05・06 (東から) 下 SD05土層 (東から)

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成16年9月24日、松尾伊都子氏より、福岡市博多区東雲町2丁目1-1における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。この地点は麦野C遺跡範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査を行い、現地表下20～70cmの明赤褐色ローム上で遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形が採られることとなった。

発掘調査の開始は平成17年4月15日。同年5月31日にすべての作業を終了した。尚、調査にあたっては松尾伊都子氏を始めとする関係各位に多大な協力を賜った。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で行った。

調査委託	松尾伊都子
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	埋蔵文化財課 課長 山口譲治 調査第2係長 池崎譲二
調査庶務	文化財整備課 管理係 鈴木由喜
調査担当	埋蔵文化財課 調査第2係 藏富士寛
調査作業	寺園恵美子 小路丸嘉人 永田優子 池 聖子 小池温子 増田ゆかり 中野裕子 永田律子 阿部幸子 早川 浩 幸田信乃 夏秋弘子 吉川暢子 齋部保壽
整理作業	柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

遺 跡 名	麦野C遺跡 第10次調査				
遺跡調査番号	0509	遺 跡 略 号	MGC-10		
地 番	博多区東雲町2丁目1-1	分布地図記号	12麦野		
開 発 面 積	1,664㎡	調査対象面積	875.7㎡	調 査 面 積	677㎡
調 査 期 間	2005.4.15～2005.5.31				

II 調査の経過

1. 麦野C遺跡

麦野C遺跡は福岡市域の南端にあり、春日丘陵の東側に位置する台地上に存在する(図1)。台地の東側には御笠川、西側には諸岡川が流れ、これら河川による開析により、この台地は独立丘陵状を呈している。また台地北西側を中心に多くの谷が入り込んでおり、台地自体はいくつかの舌状をなしているのだが、現在この舌状台地ごとに、麦野A～C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡等の遺跡が存在している。



図1 周辺の遺跡 (1/25,000)

これら各遺跡の関係には不明部分も多いが、これまでの調査で、この台地上では奈良時代を中心とした大規模な集落構成がなされていたことが判明している。

麦野C遺跡は台地東側に存在し、これまで9次にわたる調査が行われている（図2）。以下では正式報告がなされた調査の成果について、概観することしよう。第1次調査では奈良時代の堅穴住居23軒、土坑、溝が検出され（小畑1994）、第3次調査では、狭い調査範囲ながら、堅穴住居、土坑、溝等、奈良時代に相当する遺構がみつかった（宮井編1997）。第5次調査では、当遺跡に顕著な奈良時代の堅穴住居（45軒以上）、掘立柱建物に加え、弥生時代の堅穴住居（前期末1軒、後期初頭6軒以上）や甕棺墓（前期末）、中世（12世紀後半～13世紀）の土壇墓、溝等が調査されている（本田編2000）。第6次調査は32㎡というごく小規模の調査で、ピット2が存在するのみ（長家2003）。第7～9次調査は隣接した一連の調査であり、奈良時代の堅穴住居、掘立柱建物の他、縄文時代に遡る可能性のある落とし穴状遺構も検出されている（本田編2005）。

なお、今次調査地点（第10次）は中央部東よりに位置する。当調査地点の西側10mの地点では、第5次調査が行われている（図2）。

文献

小畑弘己1994「麦野C遺跡群」『中南部（3）』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第361集

長家 伸2003「麦野C遺跡第6次調査」池崎讀二編『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.16 福岡市教育委員会

本田浩二郎編2000「麦野C遺跡」—麦野C遺跡第5次調査概要— 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第643集

本田浩二郎編2005「中南部」8 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第867集

宮井善朗編1997「麦野C 南八幡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第501集

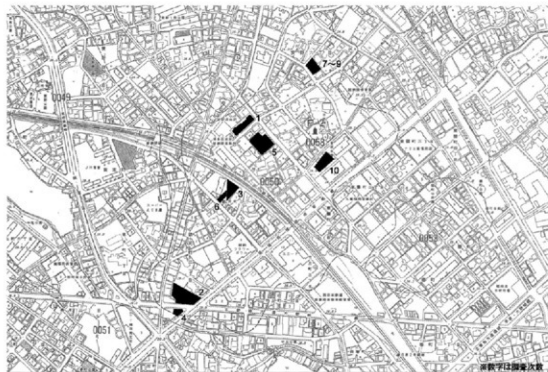


図2 麦野C遺跡（1/8,000）

Ⅲ 調査の記録

1. 調査および遺跡の概要

調査はまず、重機による表土剥ぎより開始した。排土処理の関係で土砂反転を行い、調査区を二分して調査を行っている。現況では調査区の北東側と南西側では、80cm程の段差が生じていたのであるが、北東側では30cm、南西側では70cm程の客土を除去した後、明赤褐色ローム層上に遺構面を設定した。従って遺構面は南西側が低くなっている。

今次調査では古代の竪穴住居、中世後期～近世の溝、土坑、ピット群が検出できた。下記に示す遺構以外はすべて、近・現代のものである。調査面積（677m²）の割に、遺物の出土量は少なく、コンテナ7箱分に過ぎない。以下に検出遺構、および出土遺物についての所見を述べる。

2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居 (SC)

SC02 (図5)

調査区北東隅部にて検出し、一部をSD01により切られる。調査区外へと続いており、全形を把握するに至っていない。ただ遺存部分をみれば、住居は方形を呈し、その主軸をほぼ南北方向にとるものといえるだろう。住居床面までの深さは10～20cm程であり、遺構自体の遺存状況は悪い。住居北辺の半ばには竈を有している。竈は住居北辺より張り出して存在し、壁体の構成には白色粘土を使用する。竈自体は廃絶時に大抵が破壊されており、埋土中には土師器甕（図6-4・5）の破片が2個体分まとまって出土している。支柱穴の存在は確認できなかった。尚、住居北辺の西側には壁溝が一部残っており、深さ5cmを測る。

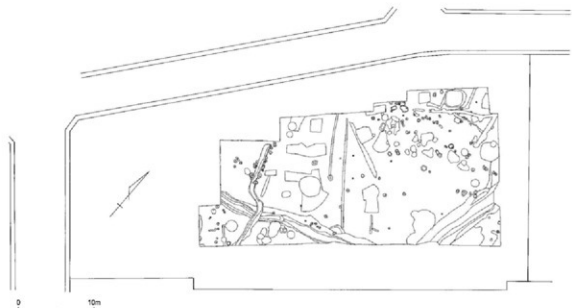


図3 調査範囲 (1/500)



図4 遺構配置 (1/200)

出土遺物 (図6)

1～3は須恵器である。1は杯蓋で、口縁端部は丸く仕上げ、内面側には浅い沈線を施す。天井部はヘラ切り後ナデ調整。2は杯底部片で、底面には高台を有する。3は皿である。口縁部はわずかに外反し、底面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。いずれも住居埋土中より出土。4・5は土師器である。いずれも壺の口縁部で、竈埋土中より出土。4は胴部がふくらみを持たず、口縁部が大きく外反するものである。外器面にはハケ目調整、内器面には横方向のヘラケズリを施す。5は胴部がわずかに張り出し、頸部がすぼまりをみせるもので、口縁部は大きく外反している。外器面にはハケ目調整、内器面では口縁部にハケ目、胴部に斜め方向のヘラケズリをそれぞれ施す。

(2) 溝 (SD)

SD01 (図7)

調査区東隅に存在するもので、長さ13m程が確認されている。溝は南北方向 (N-13°-E) に走り、幅3.3m、深さ1.3~1.6mを測る。底面は南側へ向かって次第に浅くなっている。溝の掘り方途中に肩部が存在しており、それは溝の東側において顕著である。これは本来断面逆台形の形状をした溝が、その上部を削られ、拡幅されたことを示している。

出土遺物 (図8)

出土遺物はわずかで、しかも上層部分の出土が多い。図化したもので、下層出土は図8-3のみである。1は土師皿である。摩滅が激しい。口径12.8cm、器高2.7cmを測り、底面は糸切りによる。2・3は瓦質土器の播鉢底部片である。2は外器面にハケ目が残り、内面には7本単位による縦方向のすり目、内底部には円弧状のすり目を有する。3は内器面に6本単位のすり目を施し、内底部には円弧状のすり目を描いている。

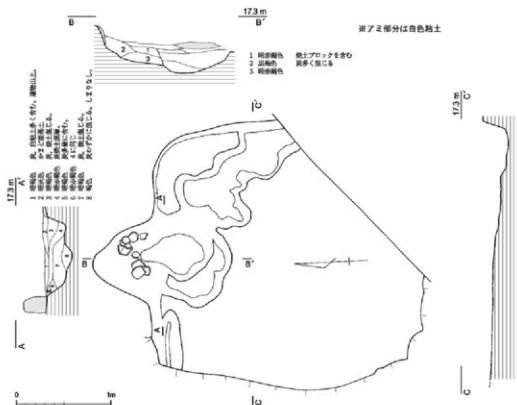


図5 SC02 (1/40)

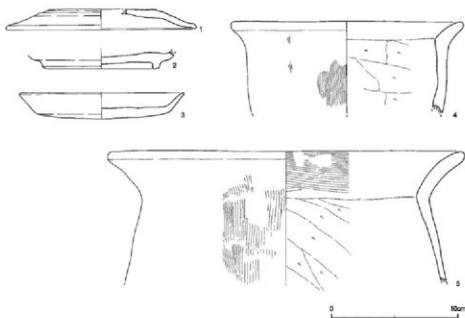


図6 SC02出土遺物 (1/3)

SD05 (図7)

調査区南側に存在するもので、長さ22m程が確認されている。溝は東西方向(N-111°-W)に走り、幅1.7~2.5m、深さ約0.8mを測る。底面は東へ向かって次第に浅くなっている。SD01と同じく、掘り返しの痕跡が認められ、溝掘り方途中に存在する肩部は、特に溝北側において顕著に認められる。断面逆台形を呈する溝が、後に上部のみを削られ拡幅されるという状況は、SD01と同じである。しかし、溝の断面C-C'をみる限り、それは一度ではないようで、土層の堆積状況をみれば少なくとも3回の掘削を指摘することができる。また西側の半分は底面に至るまでの深い掘り返しが行われていたようだ。

出土遺物 (図8)

溝の規模に比べれば、出土遺物は極少ない。溝上層部分の出土が大半で、図示したもの内、7・9・15が下層出土である。4は須恵器蓋口縁部片である。6・7は陶磁器で、6は龍泉窯青磁碗の口縁部片、7は白磁碗の底部片である。5・8は土師皿。5は口径6.5cm、器高2.1cm、8は口径6.5cm、器高2.1cmを測る。8の底面は糸切りによるもので、口縁の一部には煤が付着している。9・10は浅鉢等の口縁部片で、土師質。いずれも口縁部が肥厚する。9は内・外器面にハケ目調整、10は内器面にハケ目調整をそれぞれ施している。11は釜で、肩部に把手を持ち、その上部にはスタンプによる花卉文を巡らしている。胴部は偏球状を呈し、中央やや下寄りに鈿を有する。12~16は瓦質の深鉢。12~14は口縁部片で、いずれも外器面に複数条の突帯を持ち、その間にスタンプによる花卉文を施している。15・16は底部片。16は外器面に一部ハケ目が残る。15は底面糸切りによる。

SD06 (図7)

調査区西側に存在するもので、SD05と切り合いを有する。幅0.6~0.9m、深さ20cm~60cmを測り、南側へ向かうにつれて次第に浅くなっている。溝は南北方向に走っているが、途中で屈曲しS字を描く。出土した遺物はいずれも近世以降のものであり、図化は行っていない。

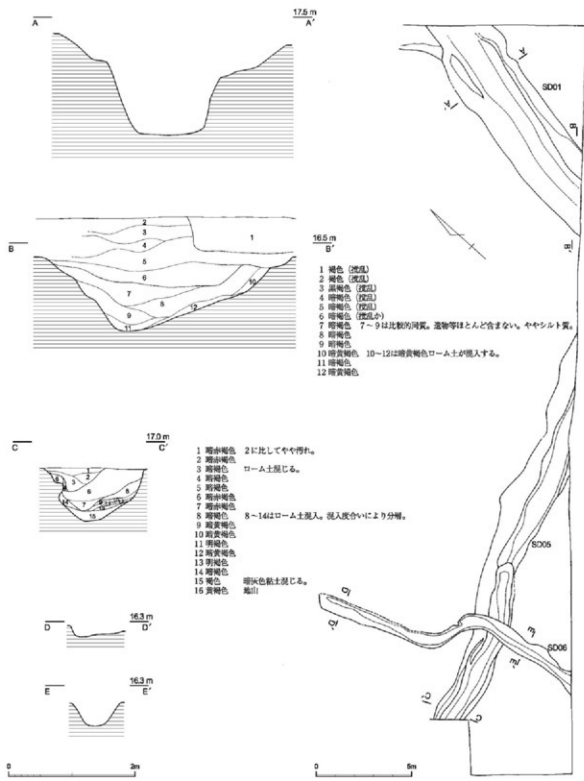


図7 SD (1/200,1/60)

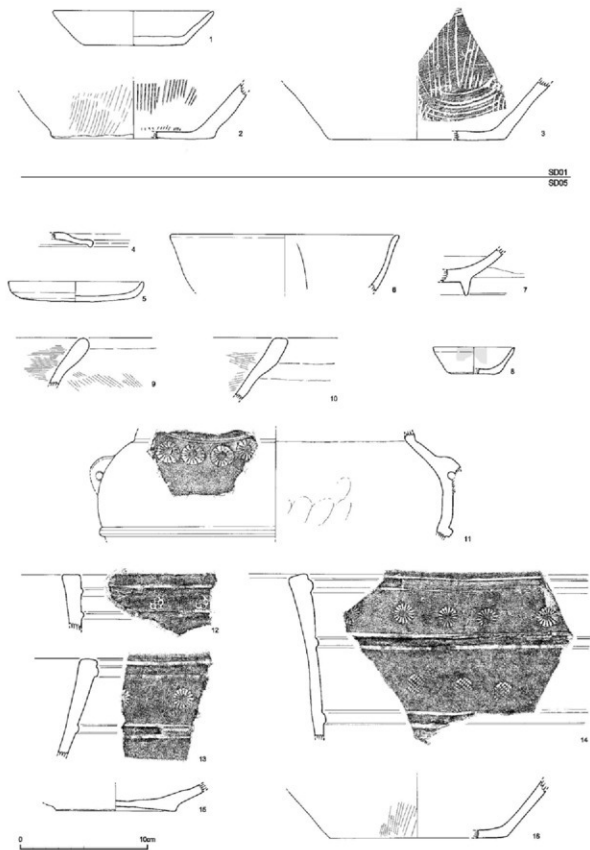


图8 SD01·05出土遺物 (1/3)

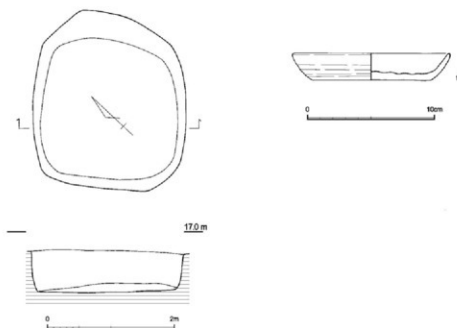


図9 SK03 (1/60,1/3)

(3) 土坑 (SK)

SK03 (図9)

調査区の北側に存在する。若干の乱れも生じているが、平面形は一辺1.2mの略方形を呈する。深さは30cm程で、壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面はほぼ平坦である。

出土遺物 (図9)

図化に耐えるものは少なく、ここでは1点のみ示した。1は土師皿である。口径12.5cm、器高2.1cmを測る。底面は糸切りによる。

IV おわりに

今次調査は、面積に比して遺構の数は少なく、密度も薄いものであった。以下では調査の成果ならびに課題を列記し、まとめて代えることにする。

検出した堅穴住居 (SC02) は、出土遺物より8世紀後半に比定できるだろう。また今回の調査では、調査区の東・南側において溝を3条検出したが、その内、SD01・05は規模も大きく掘り方もしっかりとしたものであり、規模・形状の類似すること、そして出土遺物に大きな時期差をみる事ができないこと、を考えれば、両者は一連の溝として考えたほうが良いだろう。数度の掘り返しが認められることはすでに述べたが、下層の遺物は少ないながらも、15～16世紀頃の特徴を示し、遺構の掘削はこの段階に求めることができるだろう。同様の大溝は第5次調査においても検出されているが (SD004・005・009)、報告によればこれら溝は12世紀後半から13世紀に位置づけられており (本田編2000)、今次調査におけるSD01・05とは、大きな時期差が存在している。両者の関連も含め、これら大溝の性格究明は今後の課題といえよう。

文献

本田浩二郎編2000『麦野C遺跡』—麦野C遺跡第5次調査概要— 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第643集



調査区北東側全景(南西から)



調査区南西側全景(北東から)

図版 2



SC02 (南から)



SC02 窟 (南から)



SK03 (北東から)



SD01 (北から)



SD01 (南から)



SD01土層 (北から)

図版 4



SD05 (西から)



SD05・06 (東から)



SD05土層 (東から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	むぎの
書名	麦野C遺跡
副書名	第10次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第897集
編著者名	藏富士 寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	2006年10月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
麦野C遺跡	福岡県福岡市博多区東雲町2丁目1-1	4013	0050	33° 32′ 51″	130° 27′ 57″	20050415～ 20050531	677	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麦野C遺跡	集落	奈良時代 中世後半期 近世	竪穴住居 1 溝 3 土坑 1	土師器、須恵器 国産陶磁器 瓦質土器	

要 約	<p>検出した竪穴住居(SC02)は、出土遺物より8世紀後半に比定できる。溝(SD01-05)は下層の遺物が15～16世紀頃の特徴を示し、遺構の掘削はこの段階に求めることができる。同様の溝は第5次調査においても検出されているが、報告によれば、これら溝は12世紀後半～13世紀に位置づけられており、今次調査におけるSD01-05とは、大きな時期差が存在している。両者の関連も含め、これら溝の性格究明は今後の課題といえる。</p>
-----	---

麦 野 C 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第897集

2006年10月13日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 田中印刷
福岡市西区大字飯氏947番地の2



遺跡名	遺跡略号	調査番号
斐野C遺跡第10次	MGC-10	0509